

京都は「平安京」とよばれ、王朝文化の中心地でした。天皇、それと親戚関係を結んだ摂関家とよばれる藤原一族を中心とした王族・貴族や大寺社が「みやこ」とよばれる京都に集まりました。一方その貴族寺社は、地方に、奈良時代に行われた公地公民制をいつのまにか「荘園」にして私有化し、配下のものを国司・領主・受領(すりょう)として派遣して天下をわたくしに支配しました。

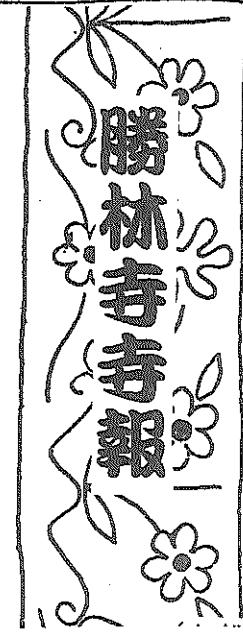
この世をばわが世とぞ思う望月の欠けたことのなしと思えば」と歌った(藤原道長)

貴族の傲慢な時代でした。大陸から攝取した漢字文化のうえに、わが國独自の「万葉仮名」そして「かな」文字がうみだされ、一方、「夫多妻制のなかで磨かれた女性の優美感覚から、一挙に「物語り」「隨筆」「日記」などの作品群が生まれ、恋の切なさ・無常観。「もののあはれ」が盛んに謳われました。いわゆる「王朝文化」です。

この間、地方にあっては、中央貴族や大寺社から「受領(すりょう)」といって「庄」の管理を任せられたひとたちが特に関西で次第に地方・豪族・領主化し力を蓄えていきました。

また、関東では、開墾地の支配権をめぐって「受領」「ご家人」の間にご恩と奉公の絆で結ばれた武家集団が発生していきました。ここから当然地方では領国大名、鎌倉の武家幕府と中央貴族との勢力争いが起つて来ます。具体的には院政を敷く天皇、摂関政治の中核である藤原貴族や大寺社との間に虚々実実。陰謀や駆け引きが激しく行われます。平家の棟梁、平清盛は、院の上皇と外戚関係を結び、王朝貴族や大寺社に取り入つて天下を取ろうと画策し、一時天皇を伴つて摂津の

京都といつ街



「福原」に都を移したりしますが、かえつて上皇方にうとまれ、関東武家棟梁源頼朝らに1185(寿永4)壇ノ浦に滅ぼされます。またその源氏も「天下一の大天狗」後白河法皇に翻弄されて頼朝・義経兄弟相剋のしかけにのせられ京都から去つて行きます。このあたりの経緯はラジオドラマなどご承知の通りです。

このように平安京と呼ばれた京都の街は、為政者も寺社もそれから住民も且つ、文化も、何から何まで根こそぎに変えられてしまいまして。

鶴の長明は一一五五年、いまの下賀茂神社の櫛宜の子に生まれ最後には日野に隠遁して『方丈記』を書きました。その冒頭に

「行く河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。玉敷(たまき)の都のうちに棟を並べ甍を争える。高き卑しき人の住まいは、世々を経て尽きぬものなれど、これを誠かと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。あるいは去年(三〇)焼けて、今年造れり。あるいは、大家滅びて小家となる。」

その上この間の100年間には京都をふくめ全国に大火災・大震災・台風・大飢饉・流行病などの災害が毎年のように襲っている。関東北陸大災害を経験したが、現代と違い脆弱な住居、防災設備もなく救急医療など全くない。当時の民衆は逃げ惑い屍を捨て天を仰いで歎くしかなかった。そして難民たちはただひたすら生き延びる場所をもとめて都、京都の街へ流れ込んできた。

親鸞さまが、幾つかの計画をもつて京へ帰ってきたのは、1231年、自身すでに五九歳。その前年にも、年表には「七月諸国震(あれ)降り、八月大風雨、大飢饉。京都疱瘡流行。餓死者市街に充つ」。とある。

親鸞さまが生まれたのは一二世紀の半ば。京都に帰ってきたのは法然さまの残された香りでもと慕つて帰ってきたのであつたがその法然から後を託された隆寛律师は一年前に亡くなつていたし聖観法印も二年後に亡くなつて

いた。

帰京後親鸞は五条西洞院に住み、さっそく

その先輩を尋ねて教えを乞い、「一念多念文意」や「唯信鈔文意」などの著書を著した。

妻子さえ妻の故郷越後に帰さねばならなかつた。自らも火災で家を失い親鸞はそれから

転々と住居を移しながら、それでもお念仏の中で生き抜いた。庶民すなはち難民たちの

中で。親鸞は一生、王朝貴族文化を象徴する「和歌」は意識して歌わなかつた。だのに『和讃』を二六〇首ばかりも残している。日本の歴史の中で親鸞一人。それは親鸞は晩年貴族王朝文化のなかではなく、もっぱら「田舎の人々」「愚痴きわまりなき人々」「猶すなどりをする人々」といきる体験のなかでつかんだ庶民文化であった。

京都に帰つた親鸞さまを受け入れ住まわせてくれた親族も幾人かいたでしよう。宇都宮家に嫁いでいた末娘「覚信尼」の土地は、親鸞終焉の地となりました。実弟「尋有僧正」は天台宗の高僧として一字をかまえていましたから著述するうえでも随分世話になつたと思います。しかし、親族に頼つて何日も暮らせるほど平和な時代ではありません。

親鸞は幼い日のなじみを求めて、前述の「難民」。具体的には浮浪人とよばれる人買形遣い芸人)、犬神人(いぬじん)などの隸属民、白拍子などの舞姫、遊び女。などなど雑芸によつてその日その日を生きる人達と共に「今様」を歌い、布教しながら過ごしたに違いない。

そのなかから親鸞独自の「浄土真宗」が「和讃」というかたちで歌い出されてきた。

悪人正機。自力無効。本願他力のおしえ。即得往生。現正正定聚。自然法爾などなど。

九月 勝林寺 予定

一日(土) 福富剛宅 一三回忌
四日(火) 「わが心のアジャセ」観劇

神戸
華光会 七五〇遠忌
信楽先生記念講演会

二六日(日) 華光会 七五〇遠忌
二七日(木) 森戸保子 忌明法要

二九日(土) 平野孝幸宅 一周忌
三〇日(日) 山田稔宅 七回忌

二五日(火) 出石組総代会 本山参拝
帰敬式

二六日(水) みのりを聞く会
二七日(木) 森戸保子 忌明法要

二九日(土) 平野孝幸宅 一周忌
三〇日(日) 西方寺 遠忌法要

二九日(土) 森戸保子 忌明法要

二九日(土) 平野孝幸宅 一周忌
三〇日(日) 西方寺 遠忌法要



(敬称略)

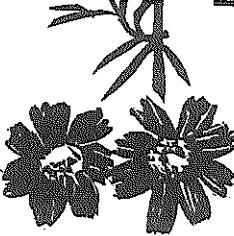
八月十三日
葬儀
京都 森戸保子様 八十七歳

八月十五日
京都 森戸保子様 八十七歳

八月十五日
広島 石崎三五様 九十歳

八月二十二日
栗尾 兼井征夫様 六十八歳

八月二十二日
栗尾 兼井征夫様 六十八歳



四(四)十一十



卷之三

